

すっかんほ

1991年9月号

トンボのいる風景

「あ、オニヤンマ」 教室に入ってきたひときわ大きなトンボに付し、どこからともなく声があがる。ブーンというような羽音が、教室中にひびきわたる。一瞬、天井は青空になり、勉強に疲れた目は、輝きをとりもどす。

「これが本物のオニヤンマなのか……」

「図鑑で見たことある。」

「……本当にいるんだ。」

不思議なことに、だれかが「あれは、オニヤンマだ」というと、だれもが納得してしまう存在感があつた。

私は、小さい頃の夢、たとえば“パイロットになって空を飛ぶたい”といふ、忘れていた夢が、時空をこえて、目の前に現われてきた気がした。そして、どんな夢でもかなうような気持ちになった。

今年になってオニヤンマを見たのは、3回。3回とも教室や職員室に入ってきたものだ。こんなことは、今までなかったことである。オニヤンマがふえてきているのだろうか。

オニヤンマは、山あいの谷を巡る小さな流れで幼虫(ヤゴ)の時代を過ごし、成虫になると、木立のフチ、道路、水路などに沿って直線上に飛び、往復している。つまり、自分のなわばりをパトロールしているのである。また、オニヤンマをはじめとする大型のヤンマの仲間には、真夏の白没前後に、夕焼け空を背景にして、黄昏群飛する性質がある。小さな虫を追いかけて、力強く羽ばたき、滑空するのだ。その数は数百におよぶこともあるという。想像するだけでも、わくわくするが、今から30~40年前は、日本中、どこでもみられた風景だ、たらしい。高度経済成長の時期、開発の名のもとに、林が切りたおされ、谷もつぶされ、トンボの幼虫の生活空間は、激減した。

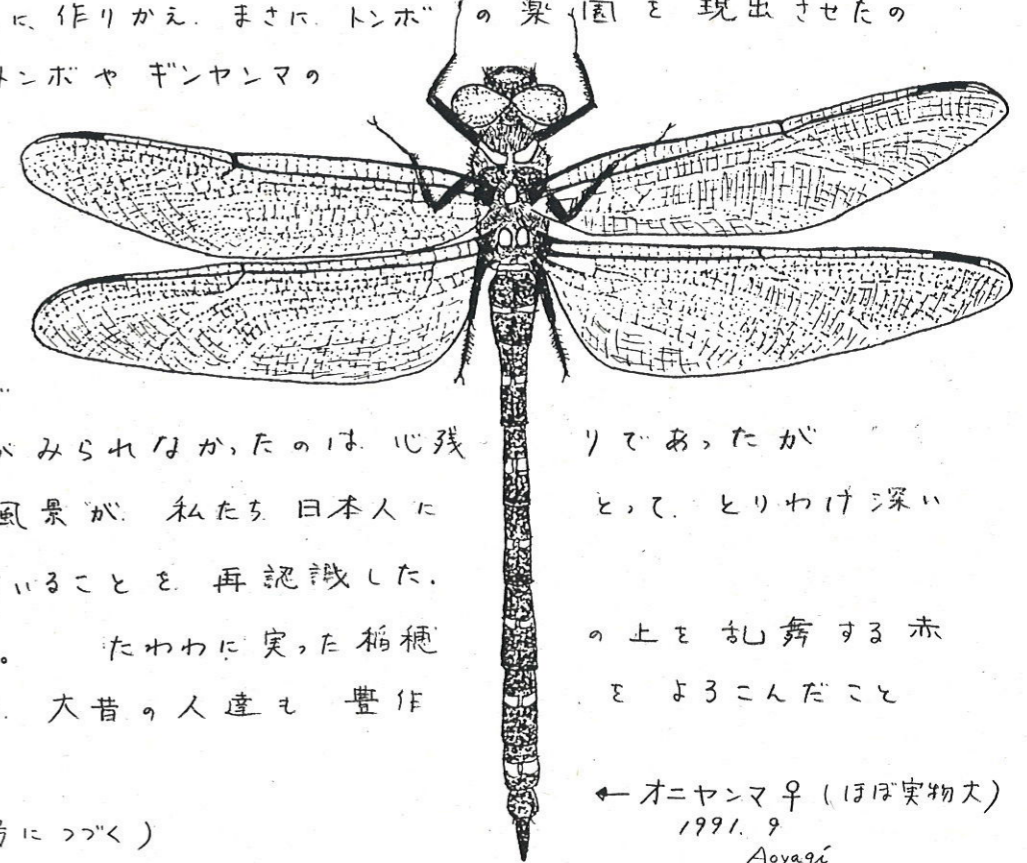
ところで、この夏、高知県中村市にある「トンボ王国」をたずねてみた。あの黄昏群飛がみられるというからである。この「トンボ王国」は、地元の人達が土地を買いあげ、そこをトンボの好む環境に作りかえ、まさにトンボの楽園を現出させたのである。イトトンボやギンヤンマの

産卵がさかんに行われ、多くのヤンマが飛びかっていた。

天候のせいでも、黄昏群飛がみられなかつたのは、心残り。トンボのいる風景が、私たち日本人に意味を持っていることを再認識した。

季節は秋。たわわに実った稲穂、トンボを見て、大昔の人達も豊作だろう。

(10月号につづく)



りであつたが、とりわけ深いの上を乱舞する赤とよるこんだこと

←オニヤンマ♀(ほぼ実物大)
1991.9
Aoyagi